

第 215 回 愛宕山の江下武二像と後藤新平像

筆者：林 久治（記載：2023 年 1 月 7 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいたので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要不可欠である。図 1 には、2022 年の国内の感染者数と死者数の変遷を示す。

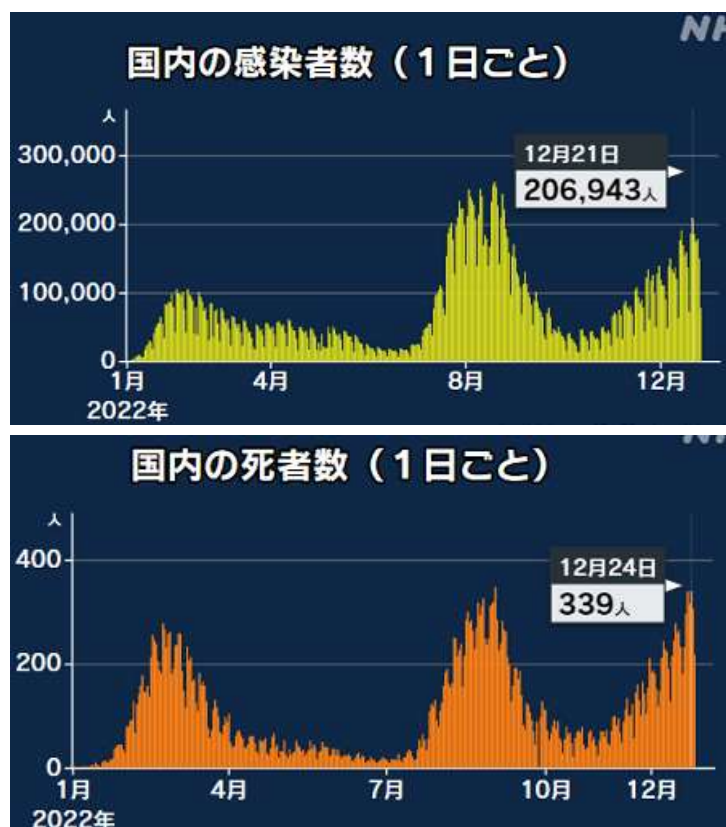


図 1.

上：2022 年の国内感染者数、
下：2022 年の国内死者数、
本図は、[3\) のサイト/1](#) より借用。

昨年の 7 月は、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、8 月 4 日から 6 日までは大変涼しくなったので、6 日には東京でも銅像探索を再開した。大阪在住の 3 人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は 9 月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってからも、運動を

兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#)から閲覧出来ます。

[前回の記事/f](#)では、市川神社の小池幸三郎像を紹介した。本年の1月4日、私は港区愛宕山に行き、江下武二像と後藤新平像を探索した。後藤像は[1\) のサイト/](#)に収録されていないが、江下像は収録されている。しかし、江下像の基本情報が不足しているし、同じ軍神の小池像と比較してみようと思ったからである。本稿は、江下像と後藤像の探索記で、私の意見などを青文字で、資料の内容などを緑文字で記載する。

(2) 東京都港区の愛宕山と青松寺

図2左に、帝都地形図(1930年)の愛宕山付近を示す。本図には、愛宕山の標高が「88.2」と記載されている。これが「m単位」であれば、私は「大いに疑問である」と思った。なぜなら、私の故郷にある徳島市城山は標高61.7mで、愛宕山より遥かに高いからである。ウィキペディアを見ると「**愛宕山(東京都港区)は25.7mの標高**」とある。



図2. 左：帝都地形図(1930年)の愛宕山付近、本図は、[4\) のサイト/](#)より借用。右：青松寺へのアクセス地図、本図は、[5\) のサイト/1](#)より借用。

図2左の地図には、「青松寺建築中」とある。後で紹介するように、青松寺は関東大震災で全焼し、1929年に本堂が再建された。よく知られているように、東京放送局は愛宕山頂に建設され、1925年3月22日に日本で初めてのラジオ放送を開始した。現在は、NHK放送博物館となっている。

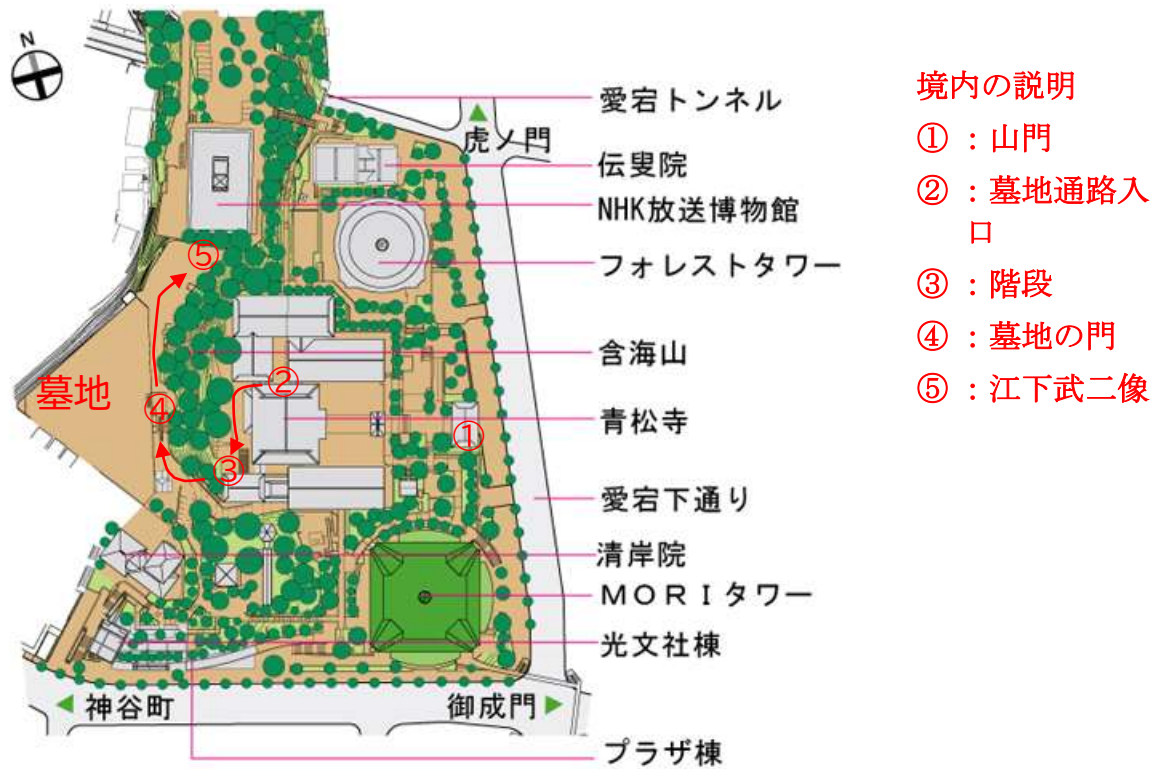


図3. 上：青松寺の構内図、本図は、[6\) のサイト/1](#)より借用。下：青松寺の山門。

私は、1月4日に愛宕山に行った。江下像と後藤像との探索が目的であったが、初詣に愛宕神社にも参詣する積りであった。図2右に、青松寺（以後は、当寺と書く）へのアクセス地図を示す。私は神谷町駅から近道で青松寺へ行こうと思い、清岸院（図3上を参照）から愛宕山の山麓を抜けて行った。しかし、道は迷路のよう

で、危うく遭難しそうになった。矢張り、急がば回れで、図2右のアクセス地図に従って、愛宕下通りから行けばよかった。当寺の構内図を図3上に示す。

当寺の山門を図3下に示す。山門は大きくて立派で、愛宕下通りに面して建っていた(図3上の①地点)。この道順では、迷わずに到着することが出来る。当寺や江下像の紹介は、[7\) のサイト/1](#) や [8\) のサイト/u](#) が優れている。それらによれば、当寺の由緒は次の通りである。

①曹洞宗・萬年山青松寺は太田道灌ゆかり寺院。文明8年(1476)創建。江戸時代は長州藩・土佐藩・津和野藩などが江戸で藩主や家臣が死去した際の菩提寺として利用した。

②青松寺が現在の地に落ち着いた1600年頃は、寺中に「獅子窟」僧堂があり幾多の人材を輩出していました。1875年、獅子窟学寮内に曹洞宗専門学本校が開校します。翌年、駒込吉祥寺の旃檀林と合併し、今日の駒澤大学へと連なっています。

③1923年の関東大震災で境内堂宇全てが消失し、1929年に新たに建立された本堂は、大震災で火災を被った後ということもあり、当時はまだ珍しい鉄筋コンクリートで造られました。

(3) 江下武二像

私は当寺の広い境内のあちらこちらを江下像を探し回ったが、本像を見つけることができなかった。本像の所在を示す案内も無かった。そこで仕方なく、寺務所に行って、本像の所在場所を尋ねた。その結果、本像は墓地の隅の分かり難い場所(図3上の⑤地点)にある事を教えていただいた。図3上には、本像に行く道順を矢印で示した(②→③→④→⑤)。各地点の写真を以下に示す。



図4.
図3上の②地点、本殿と寺務所の間
の通路に「墓地通路」との矢印がある。この矢印の先にある門をくぐって、庭園に入る。



図5.
図3上の③地点、
本殿裏の庭園を端
まで行くと、階段
がある。この階段
を登る。



図6.
図3上の④地点、
③地点の階段を登
って右に曲がる
と、メイン墓地の
門に至る。この門
に入らず、壁際を
さらに直進する。



図7.
図3上の⑤地点、
④地点をさらに直
進すると、墓地の
端に1基の銅像が
設置されている。
設置地点はNHK放
送博物館の真裏で
ある。



図 8. 江下武二像とその周辺

図 8 に江下武二像を示す。本像周辺には、本図に写っている石碑と碑文しかなかった。石碑には「肉弾三勇士三霊」と彫られていた。碑文は風化が激しく、読み難かった。[7\) のサイト/1](#)には、本碑文が収録されている。碑文建立の日付と設立者の名称が、次のように記載されていた。

昭和 9 年 2 月 22 日

肉弾三勇士銅像建設委員会 委員長醫學博士 金杉英五郎

ウィキペディアによれば、金杉英五郎氏の略歴は次の通りである。

金杉 英五郎 (1865 年 9 月 2 日 - 1942 年 1 月 26 日) は、日本の医学者、政治家。衆議院議員、貴族院勅選議員。下総国香取郡古城村の名主金杉与右衛門の子として生まれる。叔父で、内務省書記官を務めていた金杉恒の養子となる。東京帝国大学医科大学にて医学を学んだ後、ドイツへ留学。ヴェルツブルク大学、エアランゲン大学で学んだ。その後、1892 年に、高木兼寛経営の東京病院 (現、東京慈恵会医科大学附属病院) にて勤務をする傍ら、東京慈恵医院医学校 (現、東京慈恵会医科大学) にて、講義を行う。1921 年に、東京慈恵医院医学校が、大学令に基づき、大学に昇格した際、東京慈恵会医科大学の初代学長となった。耳鼻咽喉科という専門科を創設した人物として知られている。

[7\) のサイト/1](#)には、肉弾三勇士像の建立経緯や、戦後それが 3 分割されて移設された経緯が詳しく記載されている。その概略を以下に示す。

①爆弾三勇士 (肉弾三勇士とも呼ばれる) とは、独立工兵第 18 大隊 (久留米) の江下武二 (えした たけじ : 1910. 11. 22-1932. 2. 22、佐賀県出身)、北川丞 (きたがわ すすむ : 1910. 3. 8-1932. 2. 22、長崎県出身)、作江伊之助 (さくえいのすけ : 1910. 10. 17-1932. 2. 22、長崎県出身) の 3 名の一等兵 (死後伍長に特進) である。

②第一次上海事変にて、昭和7年（1932年）2月22日にトーチカと鉄条網とクリークで守られた敵陣へ突入するために、鉄条網を破壊し突撃路を切り開くために点火した破壊筒を3名で抱えて敵陣に突入。破壊の爆発に巻き込まれて3名は戦死したが鉄条網の破壊には成功。突撃路を切り開いた英雄として讃えられ「昭和最初の軍神」とされる。

③昭和9年、全国からの寄付金が集まり、貴族院議員・金杉英五郎が委員長となった「肉弾三勇士銅像建設会」によって東京都港区の青松寺に三人が破壊筒を抱えて突撃する様子の銅像「肉弾三勇士の像」（新田藤太郎作）が設置された。

④三勇士の像は戦後に撤去され、後に切り離された「江下武二の像」の部分のみが新たな台座とともに青松寺に安置されている。「北川丞の像」は長崎県北松浦郡佐々町にある三柱神社に移築。「作江伊之助の像」は所在不明。

なお、三勇士の像を制作した新田藤太郎の経歴は、[9\) のサイト/](#)に詳しい紹介がある。その概略を以下に示す。

①新田藤太郎（にった とうたろう：1888－1980）は、大正－昭和時代の彫刻家。文展、帝展で入選をかさね、昭和7年審査員となる。戦後は郷里の香川県にかえり、制作につとめるかたわら県美術展の創立につくした。東京美術学校（現東京芸大）卒。代表作に「肉弾三勇士」「菊池寛」など。

②今は、「肉弾三勇士」を作った、「新田藤太郎」の名前を、知る人はいません。新田藤太郎先生は、国威発揚の銅像に腕を発揮していました。しかし東京空襲でアトリエを焼失し作品を失ってしまいました。戦後、国威発揚の主導者とみなされ、香川県に戻って中央の彫刻から隠棲してしまい、正当な評価を受けないまま、地方に埋もれた彫刻家です。

③「肉弾三勇士」についてのインタビュー：「（新田）戦争でつぶれてしまいました。戦後、つくり直す話が何回かあったが、時代が変わったので、金が集まりませんでした。あの作品は、最初の構想では三人が走っているのではなく、一人が鉄砲でやられたところを考えていたのですが、つくり出すと軍の幹部がつきっきりで注文をつけるので、最初の構想と違ったものになりました。あのときの軍隊といえば、命令と服従しかなかったからね。それでもあの作品の人气がよかったのは、三人のモデルの個性を徹底的に調べあげたからでしょう。」

④「肉弾三勇士の原型は残っていないんですか」。「（新田）残っていません。二千点くらいあった作品とともに、空襲でやられてしまいました。また、全国に約180基ぐらいあった銅像も、供出で持っていかれてしまいました。東京・目黒区の正覚寺にある「先代萩・政岡」の銅像は、いったん持っていかれたのですが、戦争が終わったので、また戻してくれました。」

以上の資料などにより、江下像の概要は次の通りです。

江下武二立像

設置場所：東京都港区愛宕2-4-7 萬年山青松寺墓地（NHK放送博物館に隣接した場所）

制作者：新田藤太郎

設置年：1934年

設立者：肉弾三勇士銅像建設委員会（委員長・醫學博士金杉英五郎）

設置経緯：肉弾三勇士とは、独立工兵第18大隊（久留米）の江下武二（えした たけじ、1910.11.22-1932.2.22、佐賀県出身）、北川丞（きたがわ すすむ）、作江伊之助（さくえいのすけ）の3名の一等兵である（死後伍長に特進）。1932年に第一次上海事変で敵陣を突破して自爆し、突撃路を開いた「昭和最初の軍神」とされる。1934年に「肉弾三勇士の像」が青松寺に設置されたが、戦後に撤去され、後に切り離された「江下武二の像」の部

分のみが新たな台座とともに青松寺に安置されている。「北川丞の像」は長崎県北松浦郡佐々町にある三柱神社に移築。「作江伊之助の像」は所在不明。

碑文

忠孝の心を存し仁義の事を行い難至って節見はれ累至って行明かなるは我日本帝国臣民の伝統的精神にして其れも善き例を示したるは廟行鎮の役に挺進爆薬筒を抱き肉弾と化して瞬間に能く敵前鉄条網の堅陣を爆破し以て皇軍進出に便ならしめ碎身奉公の誠を致したる作江伊之助・北川丞・江下武二の3士にして其忠烈古今に絶し其壮烈世界を震撼す真に所謂死して護国の鬼となり永く報国の訓を掲けたるものと謂ふへし依て茲に銅像を建て建設して3士の遺骨を其の内に納め以て忠魂を無窮に弔い義烈を万代に顕彰する所以なり

昭和9年2月22日 肉弾三勇士銅像建設委員会 委員長醫學博士 金杉英五郎

大東亜戦争の敗戦前には、万世橋にあった「広瀬・杉野像」や青松寺にあった「肉弾三勇士像」は国威発揚のシンボルであり、東京見物のお上りさんや修学旅行生が必ず訪問する名所であった。しかし、戦後は、これら2像は「戦犯」との烙印を押されて、撤去されてしまった。「肉弾三勇士像」は3分割され、江下像のみが青松寺の目立たない場所に保管されている。

敗戦当初は、米軍、C国、K国などの目が届かない場所に江下像を隠匿したのは、致し方無い処置であろう。しかし、敗戦後76年余りが経過した現在、当寺に江下像を拝観するために訪れた人達が本像の設置場所が分からない現状は、いかがなものか？一方、軍神の一人である小池幸三郎さんの銅像は、川口神社境内の見やすい場所に安置されている。小池像より江下像が、より微妙な立場にあるので、私は次のような処置を青松寺にお願いしたい。

寺務所で、「小池像拝観券」と「本像の拝観ルート」を発行しては、いかがでしょうか。

江下一等兵は21歳で戦死しました。現在は、ウクライナで戦争が続いていますが、国を守るとは、このような若者が命を捧げることのようにです。

(4) NHK 放送博物館の後藤新平像



図9. NHK 放送博物館の3階入口

私は青松寺で江下武二像を探索した後、隣にある NHK 放送博物館に行って、後藤新平像を探索した。本像は、[1\) のサイト](#) / の「旧日本の銅像ギャラリー」に収録されていたが、「新日本の銅像ギャラリー」には何故か収録されていなかった。

NHK 放送博物館に入ると、案内嬢から「エレベーターで3階に行って下さい」と言われた。3階に上がると、展示室の入口に1基の胸像があった。その写真を図9に示す。



図 10.

左：後藤新平胸像、
右：本像の題字。



胸像の近接写真を図 10 左に示す。本像の説明文には「**後藤新平 1857 年—1929 年**」とあった。本像の台座正面には題字があった。その写真を図 10 右に示す。それには、「**総裁後藤新平之像**」とあった。題字の横には小さい説明板があり、そのには次のように書かれていた。

社団法人東京放送局ハ創始優ニ一年有半ニシテ聴取者貳拾萬ニ達シ遂ニ全國鑛石化ノ基礎
ヲナセリ 之レ固よりヨリ総裁タル君ノ聲望ト指導ニ負フ所其ノ多ニ因ル 依テ大正十五
年八月二十日社員總會の決議ニヨリ胸像一基ヲ鑄造シ以テ永ク其功績ヲ記念ス

社団法人 東京放送局

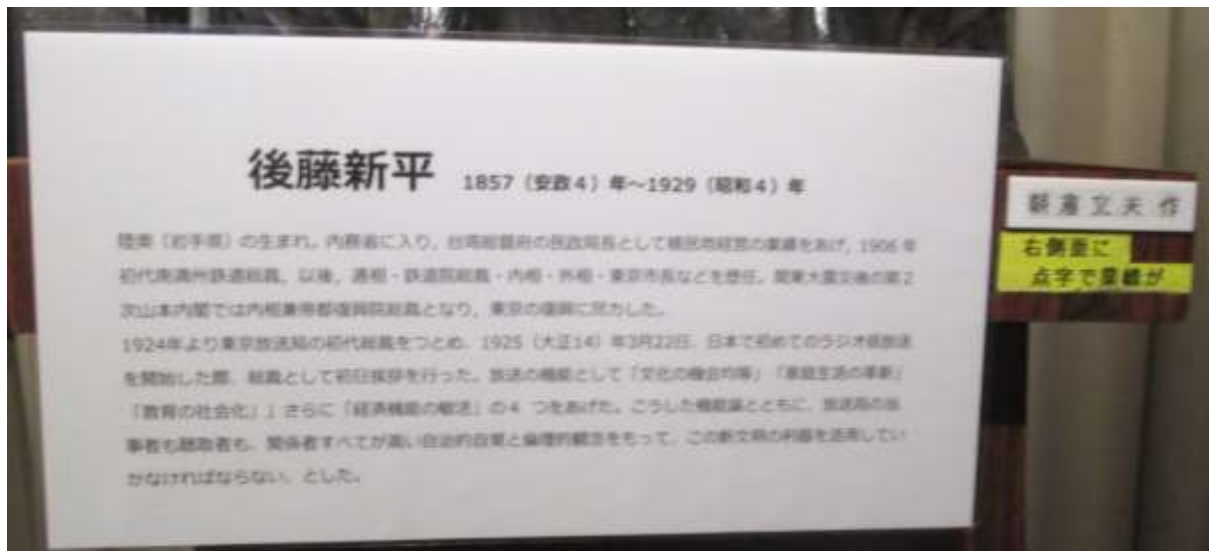


図 11. 本像の説明文

また、本像の説明文には、後藤氏の略歴が書かれていた。その文を図 11 に示す。以上の資料などにより、後藤像の概要は次の通りです。

後藤新平胸像

設置場所：東京都港区愛宕 2-1-1 NHK 放送博物館 3 階

制作者：朝倉文夫

設置時期：1926 年 8 月 20 日 社員総会の決議

設置経緯：台座正面の説明文は次の通りである。

後藤新平（1857-1929）は陸奥（岩手県）の生まれ。内務省に入り、台湾総督府の民生局長として植民地経営の業績を挙げ、1906 年初代南満州鉄道総裁、以後、逋相・鉄道院総裁・内相・外相・東京市長などを歴任。関東大震災後の第 2 次山本内閣では内相兼帝都復興院総裁となり東京の復興に尽力した。1924 年より東京放送局の初代総裁をつとめ、1925 年 3 月 22 日、日本で初めてのラジオ放送を開始した際、総裁として初日挨拶を行った。放送の機能として「文化の機会均等」「家庭生活の革新」「教育の社会化」さらに「経済機能の敏活」の 4 つを挙げた。こうした機能論とともに、放送局の当事者も聴取者も、関係者すべてが高い自治的自覚と倫理的観念をもって、この新文明の利器を活用していかなければならない、とした。

参考資料

- 1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト：<http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト：
https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/eighthwave/detail/detail_29.html
- 4) のサイト：<https://tokyopastpresent.wordpress.com/2011/01/>
- 5) のサイト：<https://uwamuki.com/fc2/seishoji/annai/access.html>

- 6) のサイト : <https://www.mori.co.jp/office/japan/atagohmt/image11.html>
- 7) のサイト : <https://sens4eki-kikou.net/?p=5321>
- 8) のサイト : <https://seishoji.jp/bodaiba.html#houtou>
- 9) のサイト : <https://plaza.rakuten.co.jp/masakuni/diary/201808150000/>